
犬のロボットと森のじいさん

敬愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬のロボットと森のじいさん

【Nコード】

N6735J

【作者名】

敬愛

【あらすじ】

FAIRY TAILで同じ様な話がありましたでしたが気にしない、気にしない。

（前書き）

実は街はじいさんが作り上げたロボット達の街だったんです！
書かないとわかりませんよね。（ネタばらし。）

犬はロボットでした

街の人々を観察するのが好きでした

背中にボタンがついていました

たぶん電源のスイッチでしょう

押した事も押された事も無いのでわかりません

ある男の子にたいそう気に入られ

お菓子を食べさせようとしてくれるのですが

ロボットなので食べられません

それが悲しいことでした

街外れの森の奥の奥に汚い格好をしたじいさんが住んでいました

彼はぶらっと街に現れました

ロボットの犬はカフェの人気者の看板犬として

飼われていたのです

そのカフェにじいさんが訪れビールを注文しました

「おい、とんずらじいさん。またじゃないだろうな。」

かわいそうと思って目をつぶってるけど酒代がたまってるぞ。」

そのじいさんは面白くも無い顔で「プログラムC・・・」と呟きました

カフェのマスターは態度を豹変させ

「ようこそいらっしゃいました。森の王。どうぞ、どうぞ好きなだけ

飲んでいってください。」そう言いました

店を出て行く間際カフェの玄関でお客に愛想を振りまいていたロボットの犬に

じいさんは「お前だけが真実だ。」と言いました

ロボットの犬はその意味がわかりませんでした

ある日いつもお菓子を食べさせようとしてくれる男の子が

木に登っているのをロボットいるのをロボットの犬は見かけました

高い木でした

次の瞬間男の子は足を滑らせて木から落ちました

一瞬記憶が飛びました

気付くと酒を飲んでいたじいさんが、ロボットの犬の背中のスイッチを押していました

少年は地面にたたきつけられる直前で動きを停止していました

街中の時間が同じ様に止まっていました

じいさんは言いました

お前には私の妻の脳を移植してある

私とお前がこの街で最後の人間だ

30分後に記憶が戻る

27分、28分、29分 あと少しで記憶が戻るという時

じいさんはうめき声をあげて倒れてしまいました

すまなかった、そう言ってじいさんは息を引き取りました

30分後記憶が戻りました

その記憶は全く自分勝手な理由で自分の脳をロボットの犬に移植したおぞましい記憶でした

L O N E L Y T O W N ? いえもうここは街ではありません

じいさんの妻は辛い記憶を抱えたまま

壊れるまで生きなければならぬのです・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6735j/>

犬のロボットと森のじいさん

2010年10月9日07時41分発行